



ふじぬま・のぼる

1945年栃木県生まれ。ヨーロッパ旅行を機に日本文化を継承する仕事に就こうと決意し、30歳で竹芸家の八木澤啓造に師事した。86年日本伝統工芸展で日本工芸会会長賞、92年に同展東京都知事賞、2010年に東日本伝統工芸展「21世紀の伝統工芸」世界の眼」でアサヒビル大山崎山荘美術館賞を受賞。12年、重要無形文化財「竹工芸」保持者（人間国宝）に認定。創作活動の傍ら全国各地に赴いて、小学生と保護者を対象とした竹とんぼ作りのワークショップを行っている。

特集 心を豊かにする教育 美に触れ合う機会を大切に

Interview

Scene

02

重要無形文化財「竹工芸」保持者

藤沼昇さん

子どもたちに もっと体験の場を

インターネットの普及は、さまざまなもの見たり、聞いたりできる「間接体験」「疑似体験」の機会を劇的に増やした。だがそれらの急激過ぎる増加は子どもたちの成長にとって負の影響もあるとされ、さまざまな人や物事に実際に触れ、関わり合う「直接体験」の重要性が再認識されている。子どもたちに体験の場を提供しようと、竹とんぼ作りのワークショップを各地で開催している竹工芸の重要無形文化財保持者（人間国宝）・藤沼昇さん。直接体験は何を生み、子どもたちの成長にどう影響していくのか、教えていただいた。

——小学生と関わることも多いですが、幼い頃に受ける教育の影響はとても大きいでしょうね。

子どものうちは自分で環境を選ばせんから、周囲の大人がいろいろなことにチャレンジさせてあげたいものです。そうした場づくりの一つとして、学校や自治体、各種団体の要請を受け、竹とんぼ作りのワークショップを全国各地で行っています。ものづくりの体験は自宅や学校ではなかなかできませんし、年齢や学校が違つ子と一緒に何かをする機会も少ないでしょう。子どもたちが自分の好きなことや、才能に気付くきっかけになればと思っています。

子どもは、興味のあることにはとても積極的に、大人が舌を巻くほどの集中力で粘り強く取り組みます。毎回、こんな姿は見たことがないと、学校の先生や保護者が驚いています。集中力も粘り強さも才能ですし、自分はものを作るのが好きだなとか、知らない人と話をするのが得意なんだとか、

何かしら気付きがあるようです。最初と最後では別人のように変わっている子どもたちの目の輝きから、いつもそう感じていきます。

——何かを作り上げることは、大きな自信にもつながる、良い体験ですね。

自分で考え、工夫を凝らすことは生きる力の根本です。そうするには知識や思考力、判断力などに加えて、道具を扱う技術も必要です。ものづくりにはその全ての要素があるのです。

例えば、竹とんぼ作りには刃物を使います。どんなに周囲の大人が気を付けていても、時々指を切ってしまう子がいますが、それは人の話を聞かない子と、道具を使い慣れていない子です。安全な使い方を最初に教えるのですが、それを聞かず自分勝手にやってみようとするのは、むしろ通りにやろうと頑張ってみても、道具を使った経験がないと力加減も分からず、予測が付かないので危険を回避しにくくなるでしょう。

せめて10歳頃までには、家にある道具くらい一人で使えるようにしてあげた方が、本当の意味で子どものためになります。危ないから刃物なんて使わせないという親御さんがいますが、小さな傷を負いながらも、子どもの頃に体で覚えたことは忘れません。

日頃から家の手伝いをさせるのが一番です。料理でも掃除でも洗濯でも、一緒にやりながらこうすると良いよ、これは危ないよと具体的に教えてあげられますし、子どもが興味を持つ要素はたくさんあるのではないのでしょうか。

体験を通して自覚する 与えられた個性と才能

——実際にやってみることで気付き、理解も深まると。

そうですね。何事もやってみることです。私は、個性を自覚し、それを伸ばしていくことが、より幸せに生きる道だと考えています。その個性を自覚するにも、まずは